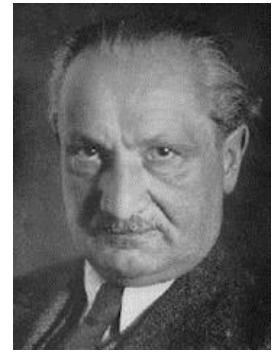


「哲学への招待・『存在する』ってなに？ ～ハイデガー『存在と時間』から考える～」

哲学カフェ in 富山：2015年5月24日

マルティン・ハイデガー(1889年～1976年)

- ・ドイツのメスキルヒ生まれ（現在のバーデン・ヴュルテンベルク州にある）
人口は8千人ほどの小さな村
- ・主著『存在と時間』（1927年）
- ・20世紀最大の哲学者として賞賛されるだけでなく、ナチズムへの関与、弟子であるハンナ・アーレントとの不倫などスキャンダルにも事欠かない。



主著『存在と時間』について

「存在とは何か？」…時間を切り口（地平）として問いかける

存在…永遠・不滅



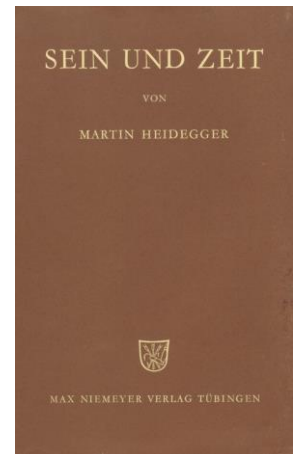
時間…生成・流転

有限な存在である人間を通して存在の意味を問いかける

人間主体 subject(⇔object) 主観－客観で対立関係になる



現存在 Dasein(there being) 「いま・そこ」存在、その時と場所になじむ



現存在

世界－内－存在 (In-der-Welt-sein, in-the-world-being)

気がついたらすでに、生活の糧を得るためあれこれ世界の中で配慮しながら生きている

※客体(object)と対立する人間主体(subject)は世界－内－存在から派生した副次的なもの

世界－内－存在

あれこれ配慮しながら暮らす存在は、たいていは日常生活の中で埋没して生きている



ごくたまに「これでいいのか」と、ふと不安になる時、現存在は「死に至る存在」として本来的自己に目覚める可能性がある

（表現はキルケゴールの「死に至る病」からパクっている）

現存在は世界と関わりつつ究極的には死の不安と関わっている（死や飢えへの漠然とした不安）

死への先駆＝本来的自己

死の不安と関わる時、臭いものに蓋をするのではなくそのようなのだと受け入れると、「死への先駆」を果たすことができ、**本来的自己**に目覚めることができる。日常生活に埋没している普段の自己は非本来自己として頹落しているが、それは倫理的に墮落しているということではない。

本来的時間性

本来的自己に目覚めた現存在は、普段の通俗的な時間概念からも脱却することができる。

通俗的な時間概念

未来・現在・過去

非本来的時間性

予期・現実化・忘却

人間主体が目的実現のためにあらゆる素材をフル活用して、未来を予想しながら活動するイメージ

実存論的な時間概念

到来・現在・既在



本来的時間性

先駆・瞬視・取り返し



死と生誕の間に自らを伸び広げるといふ仕方で存在している。一般的な「人間」として存在しているのではない。

本来的历史性

無機質な時間や3次元空間ではなく、死と生誕の間に架せられた固有の存在であると自覚した現存在は、生誕のルーツを自分固有の「運命」「宿命」に彩られた歴史的な実存として「振り返り」「取り返す」(本来的历史性)



非本来的历史性：第三者的に検証される実証的な歴史学、編年体で綴られる歴史

ナチズムへの関与

・深くコミットしたらしい

かつてはハイデガーの「黒歴史」の情報があまり発掘されておらず甘い評価が主流

近年は、書簡や「黒ノート」の発掘

・リベラル思想やコスモポリタン思想への嫌悪感

リベラル思想(個人の自由の尊重)

主体-客体関係に基づく



民族へのコミットメント

世界-内-存在、本来的历史性

弟子のハンナ・アーレントはリベラル思想の持ち主だが、ハイデガーに対する評価は甘い

『哲学への寄与』…『存在と時間』以降の主著とされる

「最後の神」

四方域、地域限定?

氏神?

ニーチェ「神の死」を意識



創造主(「最初の神」)

普遍宗教

時代や場所を問わない

「言葉は存在の家」

ヘルダーリン研究

思索-詩作



科学的言語

存在は思索-詩作のことばの中に居場所を持ち、水を得た魚のようになる

ゲシュテル(Ge-stell)

英語では en-framing → 手段のために用いるものを囲い込む、枠組みの中に入れる

「駆り立て構造」と訳されることもある

科学技術の構造が全て、経済的利益の目的の中に囲い込まれて、その利益の実現のために駆り立てられていることを示す。科学や技術が学問の真理追求や技能の向上それ自身のために追求されることがない。